小町が庵の客枕の露　曲言

餘花千句　寶永二年

浮田殿よりかいひねり狀

交りの枕をぬくも七ッ組

〔東海道名所記二〕小田原より箱根へ四里

右の方、宿（小田原）の入口に小田原陣の時の戰場あり、（中略）名物には小田原石、水道のために江戸に出しあきなふ、小田原足駄、けやきのまる木履なり、夢想枕、又宿の右の方に外郎あり、

〔書言字考節用集六服食〕鍋枕（クリマクラ）。

〔嬉遊笑覽二中服飾〕今の梁枕なき已前は、中人以下皆箱枕を用ひたりと見ゆ、（中略）梁枕とは今のよのつねの枕なり、

〔南留別志二〕一荒木氏何某といふ人、御使に奥州に下りしに、其少し前に、光堂の佛の目にいれたる金を、人の盜みし事あるを僉議するとて、秀衡が棺をあばきたり、（中略）秀衡が棺の內より、まくら一ッ、大刀一ふり出だしおきて、國主の者ども、荒木何某に見せたるなり、（中略）若藤杢右衞門といふ人、奥州までしたがひ行きて見たりとて、茂卿（荻生徂徠）が幼き時かたりき、枕はつねのくゝり枕なり、ふさまでも深紅なるが、手にてさはれば、でうのごとく手につくとなん、

〔毛吹草三〕山城　縊枕（クリ、マクラ）

以文樣爲名

〔嬉遊笑覽八忌諱〕因に云、或寺に獏枕あり、傳へていふ、加藤清正朝鮮より將來し物なりといへり、その枕を見しに、すべて木彫にて漆をぬり彩りたり、齒と爪とは獸の眞物を鏤む、其形は頭の左右より前足出て蹲踞（ウヅクマリ）たるやうに作り、下に筥の如き臺あり、頭のうへに船底の形したる板ありて、是を枕とするなり、喉の內に括機ありて頭上板の横側だてば口を開く、眼の玉すこし高く出て